

全学からの学生参加による協働型授業の新規創成

ー持続学を題材としてー

工藤 健^{*1}・大谷 かがり^{*2}・大橋 岳^{*3}・小山 太郎^{*4}・
鈴木 順子^{*5}・塚元 佑真^{*6}・寺井 一^{*7}

要 旨

中部大学の特別課題教育科目として、全学部・学科の学生参加による協働型授業を創成し実践した経過を報告する。コロナ禍以降の社会では、インターネットを利用した技術や人工知能の開発が急速に発展を遂げ、大学教育の現場は、知識伝達型の講義の場から、学生主体で新しい探究心を促す場への転換が始まっている。このような背景を踏まえ、筆者らは新しい授業をデザインし、その実践を通じて現代社会に対応できる人間力の醸成を模索している。「体験型」、「ディスカッション型」および「小論文型」に大別される授業形態を企画し、実際の科目に適用し、試行を始めている。今回、受講者アンケートおよび自由記述による感想・提案などから、これまでの取り組みの成果を検証した。概ね狙い通りの効果が表れている一方で、新たな課題が見えてきた。

キーワード

探究学習、協働型授業、グループワーク、リベラルアーツ、持続学

1 はじめに

1.1 取り組みの背景・課題

1つのキャンパスに全ての学部学科が集う4年制の総合大学としての中部大学を舞台に、筆者らはこれまで独自の「学生が作る講義」の構築を試みてきた（例えば；工藤，2005）。1クラス100名以上の全学からの受講者を対象に、毎回意見・希望を聴取し、互いの発想を紹介し合い、次の講義テーマおよび進行方法のデザインに反映して行く方法がとられた。

しかしながら、2020年に始まった新型コロナウイルス感染症（Coronavirus disease 2019：COVID-19）の世界的大流行により、ほぼ全ての対面式授業が実施不可能となった。このような状況下で、上記のような試みの継続は一旦困難なものとなった。一方で、大学教育の方法に関しては新たな発想を生み出す契機ともなった。多くの講義を「遠隔」に置き換えて実施する中で、「受講者をどう授業に参加させるのか」といった課題と改めて向き合うことで、さまざまな工夫が生まれた。例えば、筆者の1人（鈴木）は、インターネットを利用した会議ツールを応用し、グループワークを取り入れた課題解決型のリベラルアーツ授業を実現させた。これら喫緊の課題に対応し試行錯誤する過程で、

筆者らはコロナ禍以前にも増して受講者主体の協働型授業の重要性について認識することとなった。本稿では、これらの背景を踏まえて筆者らが実践してきた新しい授業創成の経緯について報告する。

1.2 教育の背景・課題

現代社会はコロナ禍を経験し、人工知能（Artificial Intelligence：AI）の開発は加速度的な発展を遂げている。このような背景のもと、学校の教育に関しても「新しい探究が生まれる場」への転換が提案されるようになった（例えば；孫，2023）。従来の知識伝達型授業の多くの部分はAIやインターネットを活用し効率化する一方で、学生が探究する主体となれるような教室をどうデザインするのか。筆者らは、これらの問いを共有し、議論を重ねながら、各々の得意分野をベースに大学教育の現場と対峙した。

2 新しい授業の創成

以上の経緯から、「ワンキャンパスの総合大学だからできる新しい授業」を模索し、2023年度より、以下のようなクラスを立ち上げた。現在は、1クラス30名以下、春・秋学期合わせて7クラスに分かれて試行し

*1 人間力創成教育院 特別課題教育プログラム 教授 *2 看護実習センター 助教 *3 人間力創成教育院 教養課題教育プログラム 准教授
*4 人間力創成教育院 教養課題教育プログラム 講師 *5 創造的リベラルアーツセンター 教授
*6 人間力創成教育院 健康とスポーツ教育プログラム 助教 *7 人間力創成教育院 語学教育プログラム 教授

ている。どのようなデザインに基づいて、どのような形態の授業を企画したのかを以下に紹介する。

2.1 授業のデザイン

全ての学部・学科から集った仲間同士によるディスカッションが要所を占めるが、ここでは「論破する」ことを良しとはしない。ワンキャンパスの総合大学で、自分と異なる意見を尊重しつつ、factを前に考え、自分の道を歩むための人間力を開拓する。

受講者全員が「考えを口に出してみる」。グループ討論により新たな問いが生まれ、必要な体験や学びの方向性に気付く。解った事や気付いた「物の理」を持ち寄って議論を1段階深める。議論の流れの中で、必要な知識や最新の研究の動向については講義形式の授業を差し挟む。これらを繰り返しながらレポート・小論文等を完成させてゆく。

2.2 授業形態

各クラス担当者の設定テーマの自由度および今後の発展性を優先し、授業形態は統一せず試行を始めている。大まかには、「体験型」、「ディスカッション型」および「小論文型」に分けられるが、多くのクラスではこれらを組み合わせた「複合型」の授業が展開されている。以下に、各授業形態の概要を示す。

体験型：

テーマに沿って理解を深めるため、現場に出て自ら体験してみる。あるいは実際に計測してデータを収集してみる。これらの経験あるいは結果に基づいて探究を進めて行く。筆者の1人（塚元）は、中部大学人間力創成教育院・健康とスポーツ教育プログラムの施設を利用し、「受講者自らが体を動かし、その様子を計測することによって自分を知る」といった体験を授業に導入した。筆者の大橋・大谷は、受講者と大学の外へ出て、研究施設や地域のコミュニティとの交流を通して問題解決への提案も含めた発表会を企画・実施した。

ディスカッション型：

グループに分かれて各回のテーマについて議論し、互いの探究を進め、新たに生じた問題を共有する。手法としては、ワークショップ（中野，2001，2003）、KJ法（川喜田，1970，2017）を参考に、全学から参加した受講者が参加しやすい授業形態に落とし込んだ。筆者の1人（工藤）は、受講者自身の考えを簡潔に複数枚の付箋に記入させ、グループワークをスタートさせた。各グループはホワイトボードを囲み、付箋に書かれた考えを紹介しつつ議論しながら分類して行く。

グループごとにまとまってきた概念をホワイトボード上に地図のように表現させ、全ての付箋を然るべき位置に分布させ、それらを用いて互いに他のグループの受講者に向けて発表会を実施した。具体的な実践例は第3章で紹介する。

小論文型：

筆者の1人によって執筆された「レポート・論文作成ハンドブック」（寺井，2024）を活用し、調査・理解したこと、考えたこと、将来への展望について小論文としてまとめ上げることを最終目標とする授業形態である。このハンドブックは、本稿執筆時点で終了している授業には出版が間に合わなかったが、今後は全てのクラス（他の授業形態も含む）で活用される予定である。

2.3 身に付くスキル

これらの授業に参加することにより、それぞれの授業のテーマについて理解を深めるだけでなく、以下のようなスキルを身につけることができる。

- ・自分の考えを簡潔に伝える力。
- ・相手の意見を理解し探究を発展させる力。
- ・必要な（正しい）情報を得るためのスキル。
- ・プレゼンテーションツールの効果的な使用法。
- ・レポート・論文の作成法。

3 新しい授業の実践記録（例）

ここで紹介した新しい授業は、中部大学人間力創成教育院・特別課題教育プログラムで運営している全学向け科目「持続学のすすめ」（行本・他，2020）の一部として2023年度に開設され、当該科目を発展させるクラスとして試行されている。この科目は、「平成21年度採択 文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム『持続学のすすめ』による実践型人材の育成－文理融合型教育による「あてになる人間」の育成－」の取り組みの中核を担う目的で発足し（行本（編），2012）現在に至る。

今回の新しい取り組みの実践記録の例として、筆者の1人（工藤）の担当クラスに関する授業内容を中心に紹介する。

3.1 全体（15週）の流れの具体例

全体を通してのテーマを『「心」は何処から来たのか？何処へ行くのか？～宇宙・地球の歴史を背景に、命の持続（生命の進化）とともに考える～』としたクラスの例を、以下に紹介する。

当該クラスの全期間（15週）のフローチャートを図1に示す。

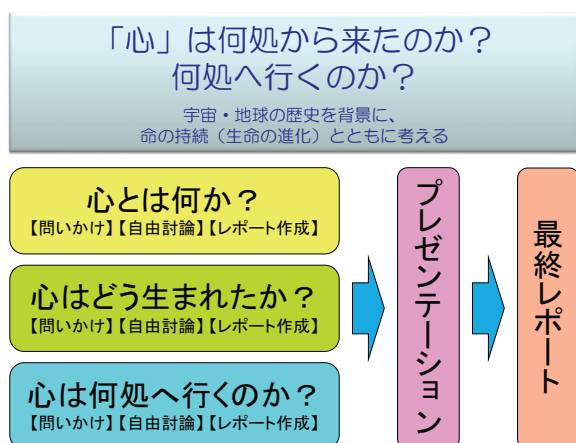


図1 全期間（15週）のフローチャートの例

3つの小テーマに分け、グループ（6～7名）に分かれて議論を深めて行く。各小テーマの冒頭には講義形式による【問いかけ】を行い、議論を始めるにあたってのアシストをし、グループ内の【自由討論】に移り、議論を収束させながら順次【レポート作成】に移る。この時のレポートが「最終レポート（小論文）」の1つの章になることを意識させる。これらを3セット（3つの小テーマ分）繰り返す。

1つ目の小テーマは「心とは何か」。ここで各グループが全期間を通して探究して行く「心」について、ある程度の共通認識を擦り合わせておく。如何様にも捉えることのできる問いかけについて、様々なバックグラウンドを持った多様な学生同士が互いの予想外の発想に驚き、それらを認めつつ自身の考えを述べ、位置付ける訓練をした。受講者の中には、これまでに受講した哲学の授業から着想を得て、複数の著名な哲学者による「心」の捉え方について調べる者も現れた。他にも、学内の他の授業とのつながりや自発的な発展学習の成果が確認できた。

2つ目の小テーマは「心はどう生まれたか」。ここでは【問いかけ】の段階で地球科学的アプローチを紹介した。恐竜絶滅後の世界でネズミのような姿をしていた霊長類の祖先の頭蓋骨の化石の変遷を辿って行くと、目が顔の前方に移動し、視力が向上し、表情筋が複雑に発達して行く様子が推測できる。これらの進化により我々の祖先は思いを表情で伝えたり、相手の表情を自分に置き換えたりすることが可能となり「思いやり」が生まれ、「心」が育まれて行ったと考えられる。また、これらの進化は約5000万年前に絶妙なタイミングで大陸が移動していなかったら生じ得なかったことなどを研究成果とともに紹介することで、我々の心は偶然の産物であることを意識させ【自由討論】を開始した。これにより受講者の間では、時間軸や様々な事象の「つながり」を意識した議論が始まった。一方で、

身近な例として、幼児が心を発達させて行く過程について紹介する学生も現れた。

3つ目の小テーマは「心は何処へ行くのか」。これまで議論してきた過去と同じスケールの未来について議論を促した。ここでは、多くの学生がインターネットやAIの発達に漠然とした不安を抱いていることが明らかとなった。「AIの提案通り行動しているうちに、未来の人類からは心が失われて行くのではないか」といった発言もあった。

これら3つの小テーマによる議論を経て、各グループのプレゼンテーションをクラス全員で聞く時間を設けた。グループごとに話し合い、役割分担を確認し、必ず全員が交代で発表することを義務付けた。プレゼンテーションツールを用いたスライドの作り方や話題提供の方法まで、互いに良いところを評価し合った。

最後は前述の寺井（2024）を利用した「最終レポート」の作成。授業担当者の論文なども紹介しつつ、「小論文」の体裁を意識した仕上がりを要求した。

3.2 ポストイット・トーク

2.2節の「ディスカッション型」で紹介した、付箋とホワイトボード活用によるブレインストーミングの様子を図2に示す。

各小テーマについて、各自の考えを複数枚の付箋に分けて簡潔に記す段階で、まずは自分の考えの整理ができる。これらを持ち寄って、互いに紹介しながらホワイトボード上でレイアウトし、それぞれの意見を分類しながら配置していく。これにより、互いの意見を相対的に比較することができる。また、意見の配置を通じて自分の「思考空間における位置」が見えてくる。

ホワイトボードにどのような「地図」を描くかに関しては議論が白熱した。複数の正解が混在する議論の中で、相手の意見を認めつつも、自身の分類法の面白さを主張するケースも散見された。一方で、単純に縦



図2 付箋とホワイトボード活用によるブレインストーミングの様子

軸と横軸を設定し、極力定量的な分類に徹したグループも現れた。

3.3 おとなり見学タイム

一つの教室で、複数のグループに分かれてブレインストーミングを展開していると、隣のグループの進捗状況やアイデアが気になってくる。この時間帯を見計らって、互いのグループのホワイトボードの状況を見学し合う時間帯を設けた。その様子を図3に示す。この時間帯を挟むことにより、煮詰まった議論が再び前進を始める事例が見られた。



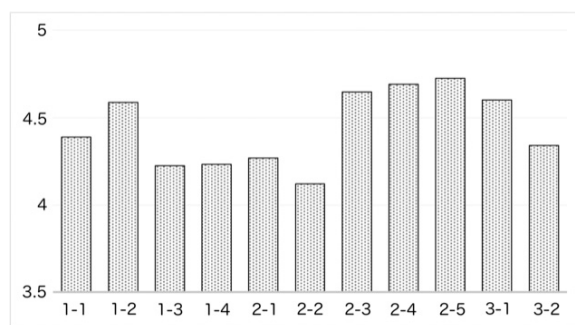
図3 他のグループのブレインストーミングの状況を互いに見学する様子

4 受講者の反応

4.1 受講者アンケート

本取り組みによる授業の2023年度秋学期と2024年度春学期に開講したクラスの中から5クラス計116名の受講者にアンケートを実施した。その集計結果を図4に示す。設問1-1～1-4は全体を通しての感想、設問2-1～2-5は受講者間での議論（討論・グループワークなど）について、そして設問3-1、3-2はレポート（小論文・報告書など）についての評価である。各設問について5段階評価で回答、最高評価を5点～最低評価を1点に換算し、その設問毎の平均点（5点満点）を比較した。全ての設問において4点以上と、概ね高い評価を得たが、設問によって多少の評価のばらつきが見られる。

特に設問2-2「この授業の議論では、あなたの考えを的確に話すことはできましたか？」への評価平均は4.12点と、全ての設問の中で最も低い評価であった。設問2-1「この授業では、他の授業と比べて自身の発言（グループ内での討論を含む）回数は増えましたか？」に関しても4.27点であり、設問全体の中で特に高い評価とはなっていない。2.1節で述べた通り、本取り組みの重要な狙いの一つは、「考えを口に出してみる」ことを出発点に、「新しい探究を生み出していく体験」



- 問1-1. 思考の深まりを感じたか
- 問1-2. 新しい発見や新しい視点の獲得はあったか
- 問1-3. 学生主体で双方向の授業をもっと受けたいか
- 問1-4. 学生主体で双方向の授業がもっと増えると良いか
- 問2-1. 自身の発言回数は増えたか
- 問2-2. 考えを的確に話すことはできましたか
- 問2-3. 考えを十分聞いてもらうことはできましたか
- 問2-4. 他の受講者の意見は、参考になったか
- 問2-5. 教員の講義（解説）やコメント・指導等の内容は、議論を発展させる上で参考になったか
- 問3-1. レポート（小論文・報告書など）を書く上で、教員の指導内容は参考になったか
- 問3-2. レポートやコメントシートなどの文章で考えを表現することができたか

図4 受講者アンケートの結果

へと移行する場を提供することである。その観点からは、今後、参加者が自身の想いを自然と表現できる教室をどう創るのかについて、さらなる工夫が必要である。

一方で設問2-3「この授業の議論では、あなたの考えを十分聞いてもらうことはできましたか？」は4.65点、設問2-4「他の受講者の意見は、参考になりましたか？」は4.69点と高評価であった。本取り組みのもう一つの重要な狙いである、「他者の意見を尊重しつつ自身の探究を深化させて行く」ことを経験させる部分においては、充分効果が得られている。

設問2-5「教員の講義（解説）やコメント・指導等の内容は、議論を発展させる上で参考になりましたか？」に関しては平均4.72点で、全設問中最高評価であった。議論の適切な局面で、探究を発展させるためのアシストが来ているようである。

4.2 自由記述

本稿末尾表1に全授業時間終了後の自由記述の例（2023年度1クラス分の全回答）を示す。これらの調査は、授業時間外に受講者の協力を得て行われた。教育研究の資料として個人情報取得せず、原文のままの公表について同意を得た上で、紙媒体の調査票に記入されたものを回収した。成績評価には影響がない旨などを伝え、授業内の取り組みとは切り離して実施した。

概ね狙い通りの反応が得られている。特に、普段顔

を合わせることもない他の学部・学科の学生同士が、少人数のグループの中で、具体的なテーマについて語り合う経験から、新しい視点を獲得した参加者が少なくないようである。

「副産物」として、プレゼンテーションのスキルを身につけたことに満足する参加者も複数確認できた。当該クラスは全員がプレゼンテーションを経験した。プレゼンテーションツールの効果的な利用法や聴衆の話題への引き込み方などについても互いに評価し合った。

5 まとめ

新しい授業をデザインし、その実践を通じて現代社会に対応できる人間力を如何に増幅し、社会に送り出すのか。これらの課題に答えを見出すべく、「体験型」、「ディスカッション型」および「小論文型」に大別される授業形態を企画し、実際の科目に適用し、試行を始めた。受講者アンケートおよび自由記述による感想・提案などから、これまでの取り組みの成果を検証した結果、概ね狙い通りの効果が表れている。新しい発見や新しい視点が獲得できたと考える受講者は圧倒的に多く、本取り組みを通過した学生の今後の成長が期待できる。その一方で、新たな課題が見えてきた。「考えを口に出してみる」ことから「新しい探究を生み出していく体験」へのステップアップに関しては、改善の余地が潜んでいる。今後の授業運営には、一層の経験と工夫が必要である。

謝辞

佐野充（中部大学副学長・人間力創成教育院長）先生には、筆者らが集い、新しい教育をスタートさせるきっかけとなる組織・環境の整備にご尽力いただいた。名古屋大学大学院環境学研究科の堀井雅恵（本学非常勤講師）先生には、グループワークの手法について、最新の情報とアドバイスを頂いた。ここに記して感謝申し上げる。

引用文献

- 川喜田二郎（1970）続・発想法－KJ法の展開と応用－，中公新書，中央公論新社。
- 川喜田二郎（2017）発想法－創造性開発のために－改版，中公新書，中央公論新社。
- 工藤 健（2005）中部大学だからできる「やり直しのできる大学」への小さな一歩-新任教員の試行錯誤の記録-，中部大学教育研究，5，59-64。
- 中野民夫（2001）ワークショップ-新しい学びと創造の場-，岩波新書，岩波書店。
- 中野民夫（2003）ファシリテーション革命－参加型の

場づくりの技法－，岩波アクティブ新書，岩波書店。

孫 泰蔵（2023）冒険の書 AI時代のアンラーニング，日経BP。

寺井 一（2024）レポート・論文作成ハンドブック，中部大学人間力創成教育院。

行本正雄（編）（2012）平成21年度採択 文部科学省大学教育・学生支援推進事業【テーマA】大学教育推進プログラム『持続学のすすめ』による実践型人材の育成－文理融合型教育による「あてになる人間」の育成 最終報告書，中部大学大学教育推進プログラム推進室。

行本正雄・古澤礼太・工藤健・上野薫・金政真・吉村和也・山羽基・平沢太郎・河内信幸・羽後静子・伊藤守弘・藤丸郁代（2020）SDGs時代の持続学のすすめ－あてになる人間への挑戦－，コロナ社。

表1 工藤担当クラス(2023年度)受講者全員の感想(原文ママ)

記 述 (問: 今回の新しい授業の感想、伝えたいことなど自由に記入してください。スケジュールや進め方など、今後に向けての改善など意見を書いてください。)
・今回の新しい授業の形式を受けてみて特に良かったところは、1つの大きなテーマに対して3つの大きな分野に分けて考えたことだ。 ・これを授業の中で繰り返すことで、「心について」というテーマに対して深く、いろいろな視点から考えることができた。 ・ポストイットを使うことで、自分の考えを簡潔に伝えることができるので良いと思った。 ・授業の最後に今回のグループ内での考えの発表や、パワーポイントでのプレゼンをすることで、発表する力が身に付くと思った。 ・今回は最初に決めたグループで最後まで授業を行ったが、毎回グループを変えてみてもいいと思った。
全体的に同じような意見に統一されてしまうのは、多分野の知識の範囲が狭いことにあると思った。
今まで履修した中で、新しい授業形態だなと感じた。そもそも大学の講義は発表や協力して何かをつくり上げるということ自体が少ないので、とても良い経験になったと感じた。 社会に出た時、プレゼンという機会が増えるので、今回このわりと少人数の中での発表でも、すごく緊張した。 講義スケジュールは全く焦る事なくできたので問題ないと感じた。 今後もこのような授業形態は必要と感じた。
最終レポートの形式の説明を最初2回目の授業で知りたかったです。 ポストイットに意見を書いて並べることをあまりしなかったのがなかったので新鮮でした。グループで40分の発表をしないといけないと聞いた時、長時間発表できるか心配でした。しかし、発表してみると、意外と時間がかかることがわかりました。グループワークもあまりしなかったがありませんでした。知らない人と話して討論することは難しそうだと考えていたけど、けっこう話すことができたのでよかったです。心はどう生まれたかでは、人間の先祖がどうやって生き残ってきたか知ることができ、表情があったから心が生まれたという考えを新たに知ることができました。動画を見ることで理解がより深まりました。テーマを説明する授業では動画があるとわかりやすいのかなと感じました。
大学に入ってから意見をまとめて発表する一連の作業をグループで行うのが初めてだった。 これから社会にでてからも行う作業だと思う。 今回の授業ではテーマが「心」だったが、他に社会問題などをテーマにしても面白いと思った。 グループの中には様々な学部・年齢の人が様々な考え方があって、他学部の人と関わるだけでも視野が広がったと思う。
私は持続学のすすめという講義を受けて、心についてとてもよく理解することができました。最初心についてといわれたとき、心といわれても何か言葉にするのは難しいと思っていましたが、グループ内で発表し合うことで自然と意見が出て、他の人の考えも聞くことができとても興味深い講義になりました。 AIがこれからどのように進化していくのかが怖いような楽しみであるような気持ちがあります。 スケジュールの進め方は問題なかったと思います。
テーマごとに少人数のグループに分かれて話し合う時間が楽しかったし、自分の考え以外も幅広く知ることができて視野が広がったと感じた。最後のレポート提出が急ぎ足になってしまったので、しっかり計画をたててコツコツやっていきたいと思う。 また、授業では他のグループの意見をきいた時に、自分の意見や質問を言わずらい感じになっていたのも、その場で言うのではなく、筆記でだして次の時間のはじめに回答、という形をとってみるのもいいかと思う。
いろいろな学部・学科出身の子がいて、学部・学科が違えば考え方も違うから、いろいろな意見が出ておもしろかった。 ホワイトボードの発表のときに、みんな前に集まったら、裏の子が見えないから、しゃがんで話を聞いていたら、ずっと同じ姿勢だったから、辛かったから、ホワイトボードは字が小さいと見えないから、パワーポイントでの発表を自分の席で聞く方が好きでした。 質問は、ずっとグループメンバーを毎回変えなかったのは、何か意図してですか？変えたかった訳ではないけれど、メンバーを変えることと変えないことで、何か変わるのか知りたかったからです。
心とは何か？という誰しも一度は考えたことがあるけど、誰しも心とはということを完璧に説明できない難しい授業でした。しかしグループワークがあるなど、一人一人がその問題に向き合うなど新鮮で、アメリカの授業を受けているようにも思えました。 心とは何か？という広い事を追求せず、身心論という心とは何か？よりせまくて専門的な事を調べてみました。身心論にも種類がたくさんあり分化的に違うという事が分かりました。「心」たったそれだけなのにとってもロマンのあふれている自分は思いました。
今回「心」という漠然としたものを考えてきて、人体には未だに解明されていないことがまだまだあるのだなと感じました。とても身近にあるものなのに誰も考えるような事がない、いざ考えてみると誰も答えを出せない、そんなものを9週に渡り考え、討論し、発表したことはとても貴重な経験であると知りました。自身が出した結論(仮説)も漠然としたものではありませんでしたが、今後も時折思い出しては考えていきたいと思いました。
正解がない「心」というテーマで授業を受けて、普段深く考えることがないことを興味を持って取り組む事ができました。 ポストイットにまとめることで、他の人の意見を理解しやすくなるので良かったです。 最後のレポートは、難しく書き方が正しいか不安でした。 スケジュールや進め方は、スムーズであったので、このままで大丈夫だと思います。 「心」についてネット上で調べても出てこない事が多いので、参考になるような文献の紹介などがあると、より理解を深めることができると思いました。
「心」という日常に欠かせないものを今回の授業のように深く考えたことがなかったので、とても良い経験になった。 当たり前のことが、なぜ当たり前になったのか考えてくることで、今まで結び付くと思っていなかったこととの関係を知ることが出来た。
グループワークで他の学部の人とはなせて、いろいろな観点から物事を見ることができました。 ただずっと同じグループよりかは、みんな(全体)で考えるというような時間を討論形式で行えばもっとよくなると考えました。 テーマは学期が変わるごとに変えた方が良いと思います。同じような意見が出てしまう可能性があるのではと考えました。 春学期の間ありがとうございました。

初回の授業の自己紹介の時間をもう少しのばしていいと思いました。いきなりグループワークするにも、相手のことを全然知らないためどのように話しかければいいかわからないので初回の授業の時間の自己紹介の部分をもう少し延ばしてほしいと思いました。 グループワークの方法はとてもいい方法だと思います。 今のままでいいと私は思います。
心とは何かについて考える授業というのはなかったので、とても良い時間になったと思います。始めは、どんな授業なのかよく分からないこともあったけれど、グループ交流は、他学部の人が多く、緊張してしまうこともあったが、学んでいることが違うため、別々の考え方があってとてもおもしろいと思いました。 今後に向けて、グループ交流があるのは良いとは思いますが、グループを変えたりすると、たくさんの意見を知ることができてよいのかなあとと思いました。
いままで個人の発表はしたことがありましたが、グループでの発表は初めてだったので新鮮でした。またグループ交流をすることで自分だけでは思いつかなかったことを知ることが出来たので考えが深まりました。 同じテーマで話し合いをしているのにグループごとにまとめた考えが少しずつちがっていて、発表を聞いていておもしろいと思いました。 レポートは形式が自由で自分でどのように構成するのか考えるのが難しいと思いました。
普段考えないテーマについて考えられたので良かった。 グループで積極的に意見を出し合えたことで、自分の視点にはない考えを取り入れられた。
普段とは違い新しい授業を受けている実感がありました。 問いかけの内容が難しいと感じましたが、グループワークを通すことで、自分の意見を発展させることが出来ましたし、それが最終レポートにもつながったりで良かったです。
チーム活動やプレゼンテーションなどがすごく良かったです。 心について、いろいろなことを学びになりました。 知らなかったことが多かったです。
工学部・機械工学科であるが今まであまりプレゼンの機会がありませんでしたが、今回この講義でプレゼンができ、とても勉強になりました ・プレゼンが終わった後、意見を言うことについて少し工夫したことがあるとさらに講義が良くなると思います。 ・まだ、自発的に手を上げ意見するというのは、勇気のいることなのかな、と思いました。
「心」に関しての議論は内容が難しくとっかかりにくい部分があった。そのため、考え方が多少固まってしまう可能性もあるかもしれないが、もう少しテーマをしぼった方が話しやすかった。 身近にあるのにあまり深く考えることがなかった「心」について自分で調べたり、話し合いの中で新しい意見を取り入れたりすることで、この講義が終わった後でも心のゆくすえがどうなるのか これからも考えてみたいと思うようになりました。今後、他のテーマで似たような機会があった時は、この講義の経験を生かしていきたいと思います。
授業でチームワークがよくできました。自分の意見も発言しながら、他の人の意見や他のチームのメンバーのアイデアなどもきいていました。 同じ点があるし、異なる点もありました。ホワイトボードに浮かんだアイデアを貼ってから、メンバーの意見と合わせて、分かりやすくように工夫しました。 他のチームの発表を聞いて良い点を理解して、自分の発表を改善しなければならないところを気付きました。授業のおかげで、チームワーク、プレゼンテーション、レポート作成のスキルを身に付けました。 他の科目や将来のことにとっても助かります。
授業は、この教室限定で行ったが、外に出て、自然を見るなどしてもおもしろいと思った。 また、動画視聴などしてヒントを得るのも良いと思う。 この授業では普段考えないような「心」について深く考察できたのでおもしろかった。
・ポストイットトークは、自分の意見、他の人の意見が短い言葉で多く聞き、感じることでよかったです。 ・グループでのパワーポイントの発表が、グループで相談する時間がすこし少ないと感じたのでパワーポイントがグループで一つまとめたものがあまりできなく、個々の発表のようになってしまったのでもう少し、発表や、パワーポイントの相談する時間が欲しいと思いました。 ・新しい講義形成で他の学科の人とも関わることができてよかったと思います。

Innovative Collaborative Class Creation Through Participation of Students from Diverse Faculties and Disciplines: Focusing on Sustainability Studies

KUDO Takeshi^{*1}, OTANI Kagari^{*2}, OHASHI Gaku^{*3}, KOYAMA Taro^{*4},
SUZUKI Junko^{*5}, TSUKAMOTO Yuma^{*6} and TERAJ Hajime^{*7}

*1 Professor, School of General Education, Chubu University

*2 Assistant Professor, Center for Nursing Practicum Support, Chubu University

*3 Associate Professor, School of General Education, Chubu University

*4 Senior Assistant Professor, School of General Education, Chubu University

*5 Professor, Creative Liberal Arts Center, Chubu University

*6 Assistant Professor, School of General Education, Chubu University

*7 Professor, School of General Education, Chubu University

Abstract

This paper reports on the creation and implementation of a collaborative course at Chubu University, which involved students from all faculties and departments as part of a special academic curriculum. In the wake of the COVID-19 pandemic, the rapid development of internet technologies and artificial intelligence has transformed the university educational environment from traditional, knowledge-transmission lectures to student-centered spaces that foster curiosity and exploration. In response to these changes, we designed and introduced a new course aimed at cultivating the skills necessary for navigating modern society. The course was divided into three main formats: experiential learning, discussion-based sessions, and essay-writing activities, all of which were trialed in actual classroom settings. Through student surveys and free-response feedback, we evaluated the outcomes of these efforts. While the intended effects were largely achieved, new challenges have also emerged.

Key words

Inquiry-based Learning, Collaborative Learning, Group Work, Liberal Arts, Sustainability Studies